

## 特別講演+公開講座

## JR 福知山線事故 なぜ想像を超す救援活動ができたのか

日本スピンドル製造株式会社 代表取締役社長

齊藤 十内

## 略 歴 (2010年10月現在)

氏名 齊藤 十内 (さいとう じゅうない)

1945年 神奈川県に生まれる

## 最終学歴

1969年 東京工業大学機械工学科卒

1971年 東京工業大学機械工学系修士課程修了

## 主要職歴

1971年 住友重機械工業入社 機械事業本部(新居浜製造所)

1991年 同社 搬送物流システム技術部長

1994年 同社 精密事業部特機部長(防衛装備)

1997年 同社 精密事業部長 兼 田無製造所長

1999年 同社 常務執行役員

2000年 新日本造機(東証2部)社長

2002年 同 住友重機械専務執行役員

2004年 日本スピンドル製造(東証1部)社長

現在にいたる

## その他の経歴

産業機械工業会理事 同 関西支部政策委員

NHK 近畿地方番組審議会委員長

防衛省兵庫地方協力部援護相談委員

兵庫県広域防災センター「ひょうご防災リーダー講座」講師

神戸市消防局「消防団長研修」講師

東工大関連 ・ 蔵前経営者懇話会幹事

・ 社会人大学大学院特別講師(イノベーション経営)

・ 大学院メカマイクロ工学専攻科非常勤講師



2005年4月25日に起こったJR福知山線列車脱線事故は、107名が亡くなり542名が被災するというJR史上最悪の大惨事となった。当社は事故現場の近くに本社工場が位置することから、トップである私の決断で工場操業を停止し、事故直後からの約3時間、公的機関の救援体制が整うまでの短い時間であったが、250名以上の社員と協力会社社員を一斉に救援活動に向かわせたことで、人命救助・被災者救援に大きな成果を挙げることができた。そのことが時間の経過とともに、「民間人として想像を超す救援活動である」として広く知られるようになり、囂らずも多くの賞賛と労いの言葉を頂くこととなった。

今回、日本臨床死生学会でお話をする機会をいただいたので、当社の社員が行った救援活動とはどんなものだったのか、その実際を紹介するとともに、なぜ「想像を超す」と言われる救援活動ができたのかについて、社員に命令をした責任者として長い時間をかけて辿り着いた結論についてお話し、加えて、全国から多く寄せられた質問の一つである、「どうして社長は工場を止めてまで救援活動を全社員に命じたのか」について、私が出発点として考えたこと、またその背景、そして日頃から思っていることなどを併せてお話しする。社員へのヒアリングから分かったことの一つに、「人を助けることは頭で理解していても、実行に移すには相当な勇気が要ること」、そして、助けてあげたいと思う気持を実際の行動に変えるには、「信頼」「共感」をベースにした「心の後押し」が必要であること、一人と二人以上では「心の後押し」において大きく違うこと、さらには、精一杯の救援活動を行った人でも、「十分でなかったという後悔がいつまでも残ること」など、救援活動を命令した私にとって大変意義深いものであり、また重い課題であるとして受け止めている。

本大会のテーマである「援助の手をさしのべるために」、そして「困難な問題に直面したとき、どのような援助ができるのか、何が必要なのか」を考える上で、何かのお役に立てれば幸いです。